

医療プレミア特集

難病の子も安心して遊べるおもちゃ完成

医療プレミア編集部

2021年1月28日



昨年12月、東京おもちゃ美術館であった施設への贈呈式で、難病の子らにおもちゃが披露された＝日本財団提供

重い病気の子どもにもおもちゃで遊ばせたい――。医療的ケアが必要な子でも安心して遊べるおもちゃ約50種が入ったセット「あそびのむし」が完成し、全国の病院や療育施設などに配られている。考案者の一人、東京おもちゃ美術館（東京都新宿区）の石井今日子副館長は「重い病気や障害があっても子どもの心は自由。時がたつのも忘れるくらいあそびに夢中になって、『あそびのむし』と言われるくらい楽しんでほしい」と話す。どんなおもちゃなんだろうか――。【東京地方部・賀川智子】

わが子と遊ぶ余裕のない医療的ケア児のママ

きっかけは3年前、同美術館で開かれた医療的ケア児ら難病の子どもと家族向けのイベントに参加したママの声だった。

「自分の子どもと遊べるなんて知らなかった」

ママは日々の子どものケアに追われて心身共に疲弊し、わが子と一緒に遊ぶ余裕すらなかったのだ。石井副館長は思ったという。

「難病の子とその家族こそ遊ぶことが大切。短い時間でも、楽しく過ごすためのおもちゃがあれば」

石井副館長はイベントを支援している日本財団（東京）のスタッフ、中嶋弓子さんと一緒におもちゃセットのコーディネートを思い立ち、2019年に制作プロジェクトがスタートした。



世界中のおもちゃから厳選された「あそびのむし」 = 日本財団提供

ママへの聞き取りも おもちゃの効果に期待感

企画・制作には日本財団の難病児支援の助成金を活用した。当事者の声を反映するため、医療的ケア児らと向き合うママたちへの聞き取りもした。

その結果、ママたちは「おままごと」のようなオーソドックスなおもちゃは選ばず、「この子の右手が動くように」という「結果」や「効果」が出るような、子どもの療育を目的としたグッズを与える傾向があることが分かった。

保育園や子育て支援センターなどで長年勤務した経験がある石井副館長はイメージを膨らませた。

「本来、遊びは障害の有無にかかわらずもっと自由なもの。結果や目的にとらわれる必要はないのでは」

その後、難病の子とその家族、子育てを研究する大学教授や理学療法士、デザイナー、おもちゃコンサルタントなど各分野の専門家の協力を得て、世界各地のおもちゃから50種を厳選したという。

その基準とは――。



昨年1月のお披露目会で遊びに夢中になる参加者の子 = 日本財団提供

おもちゃがコミュニケーションツールにも

――子どもが純粋に遊びを楽しめるもの

――医療や福祉現場のスタッフも子どもとのコミュニケーションツールとして使用できるもの

そうして選んだおもちゃはバラエティーに富む

そんな観点から選んだおもちゃは――。

▽木の車を台の上に乗せて、テンポの良い音を奏でながらリズムカルに坂を下っていく「クネクネバーン・大」

▽どんな回し方でも失敗しない、キラキラと輝くジュエルが回る「デュシマこま」

▽マットの中心を踏むと、空気圧によってハーモニカのような音色が鳴り響き、歩くのが苦手な子どもでも、音色を聴くだけで陽気な気分になる「ドレミマット」



「おなべブランコ」を制作するママたち＝日本財団提供

色やデザインが美しく、見ただけでパッと興味をそそられるおもちゃが多い。また、さまざまな種類の音や振動を感じられるものなど、五感を刺激してくれるおもちゃも入った。子どものケアをしている合間の短い時間でも遊べるのも特長の一つだ。

また、難病の子のママ自らが手作りしたおもちゃもある。

おなべブランコはママが考案

楕円（だえん）形の布「おなべブランコ」は、中に子どもを寝かせて、大人2人で持ち手を持ってユラユラ揺らし、その感覚を楽しめる。もともと障害児施設などでバスタオルやシーツを使った人気の遊びをヒントに、誰でもすぐに遊び方が分かるよう工夫し、持ち手つきの安全な専用の布の遊具にした。

ママたちが制作にも携わり、安全性テストを行って商品化したという。

昨年1月、おもちゃ美術館でのお披露目会には、7組の難病の子どもと家族が参加した。

親が楽しいと子もうれしい

「あそびのむし」を見た子どもたちはすぐに遊びに夢中になり、兄弟やパパママも声を上げて楽しんだ。参加したママの一人は言う。

「おもちゃ売り場は何歳以上対象、と表示されているものばかりで、難病の子どもはどれで遊べばいいのか分からなかった」

そして、迷ったあげく、結局は遊びより療育を目的にしたものを選んでいたという。しかし、子どもとおもちゃで遊ぶうちに気づかされたことがある。

「親が療育とか知育に一生懸命になっているよりも、親が楽しそうにしている姿を見せてあげたほうが子どももうれしいんじゃないかな」



昨年1月のお披露目会で難病の子どもママパパと一緒に楽しんだ＝日本財団提供

他の参加者からも、喜びの声が寄せられた。

「普段だったら子どもの可能性を決めつけてしまうけれど、これだけたくさんのおもちゃがあると、わくわく（感）が先走り、自分と子どもの可能性を感じることができた」

「諦めたくないことを諦めて、それが『受容』だと勘違いしかけていたけれど、そもそも諦める必要はないと伝えてくれた気がする。目の前の家族のはしゃぐ様子や子どもの笑顔を見たら自分のネガティブな考え方を否定できて、希望が見える」

病院スタッフ向けの説明会も

今後、「あそびのむし」は全国の子どもの病院や児童発達支援サービス施設など約100カ所に配られ、病院のスタッフ向けにおもちゃの使い方説明会もオンラインで実

施する予定。子どもと遊ぶ経験の少ない医療現場のスタッフたちの強い味方にもなりそうだと。

当面は施設内での使用を想定しているが、石井さんは期待を膨らませる。

「個人的な希望としては、将来的には、季節の行事や地域との交流イベントなど、施設の外の方々にも使っていただき、地域の人たちの難病児やそのご家族に対する理解につながるお役に立てればうれしいです」

一部の商品は[美術館公式トイショップ](#)でも購入できる。

<[医療プレミア・トップページはこちら](#)>

医療プレミア編集部

毎日新聞医療プレミア編集部は、国内外の医師、研究者、ジャーナリストとのネットワークを生かし、日々の生活に役立ち、知的好奇心を刺激する医療・健康情報をお届けします。

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。

画像データは（株）フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.